

# 仏心と葬儀 ―その21―

## 「女性納棺師」との出会い

それは今から約5年ほど前、まだ世の中にほとんど「納棺師」という職業が知られていなかった頃のことでした。今でこそ、アカデミー賞の外国語映画賞や日本アカデミー賞の最優秀作品賞を受賞した大ヒット映画「おくりびと」のおかげで、この「納棺師」という仕事自体が広く認知されるようになりましたが、それ以前には、せいぜい「納棺の前に死に化粧を施す仕事」程度の認識しかされていませんでした。

とある葬儀会場で飛田と出会った橋川妙子は、釧路市内ではまだ珍しい「女性納棺師」でした。そのころ橋川はまだ他の葬儀社に在籍していましたが、飛田は葬儀を通じてその後も何度か出会い言葉を交わすうち、彼女の故人に対する真摯な思いや、失った家族の悲しみなど、さまざまな面で共通するものを感じ、さらに共感するようになっていきました。ほどなく「日本一の女性納棺師を育てたい」と考えた飛田の勧めによって橋川は丸和堂に移籍。後に橋川本人も、まったく飛田と同じことを感じていたと言いますから、これもまた葬儀を生業（なりわい）とするもの同士が仏縁によって結び付けられた、不思議な因縁とでもいえるものだったのでしょう。

## 「おくりびと」を志したもう一人の女性

そもそも「納棺師」とは、死者を棺に納めるために必要な作業を行う人のことを指しますが、その日本におけるルーツはここ北海道と浅からぬ因縁があります。それは、1954（昭和29）年の洞爺丸台風における青函連絡船の沈没事故で、函館の海岸に多くの遺体が流れ着いたとき、海岸近くの住民が葬儀業者から依頼され、遺族への遺体の引き渡しを手伝ったことが納棺師誕生のきっかけであったとされているからです。

橋川と同じく丸和堂で「納棺師」を務める椎名かすみも飛田と出会ったのも、やはり5年ほど前のことでした。橋川と違ってまったく畑違いの業種から飛び込んで来た椎名は、最初は丸和堂で葬儀の裏方の仕事に就いていましたが、納棺師である橋川の仕事ぶりを見て嫌がるどころか、自ら進んで橋川の仕事を手伝ったばかりでなく、半ば独学で納棺師の仕事覚えて行くという姿勢に「強いやる気」を感じた飛田は、椎名にも納棺師になることを勧めたのでした。

飛田が葬儀の仕事を始め、43年間、最も大切にしてきた事があります。それは「人との出会い、そして人情。これなくして今の丸和堂は存在しないかも知れない」。二人の女性納棺師との出会いを振り返り、そう飛田は話します。

―つづく―

■次回の掲載は五月二十二日(土)を予定しております。